

## 先哲叢談聚議：林鷲峰（連載 その八）

雅俗の会

<https://doi.org/10.15017/4741962>

---

出版情報：雅俗. 8, pp.278-285, 2001-01-27. 雅俗の会  
バージョン：  
権利関係：



先哲叢談聚議 — 林鷲峰 —

雅俗の会

■林 鷲峰（卷之一）

林怒一名春勝字子和改字之道稱春齋號鷲峰
私諡文穆羅山第三子平安人襲父職為治部卿
法印

林怒一名…為治部卿法印 この条、念齋が参照した可能性のある人物誌のうち、『熙朝儒林姓名名録』（明和六年刊）の「初名春勝、字子和、後改名怒、字之道、一字春齋、号鷲峯、又号向陽子、道春長子、叙法印位、任式部卿、私諡文穆」という記述に最も似る。但しこれは、「春齋」を字とし、鷲峰を道春（羅山）の長子とし、「式部卿」に任じた点で誤る。念齋はこうした不備を、例え

△連載 その八▽

ば延宝八年林鳳岡撰「文穆先生学士林君墓誌」（『鳳岡林先生全集』巻百十三、『史氏備考』巻二、『事実文編』二、十三などに所収。以下「墓誌」と略記）の「先生姓林、名怒、字之道、称春齋、号向陽子。大儒羅山子第三子。母荒川氏。以元和戊午五月二十九日、生于京師。長兄敬吉不幸短命。次兄長吉夭殤。…」という記述などで適宜訂正したのであらう。猶、鷲峰の伝記としては「墓誌」のほか、鷲峰自撰「自叙譜略」（『鷲峰林学士詩集』附録卷所収、以下「譜略」と略記）があり、以下の記述はこれら二文を骨子としている。

春齋幼時羅山來江戸春齋與母氏留居平安於文詞師那波活所於筆札師松永貞徳年十七始入江戸
---

自此趨家庭、文藝日益警拔、及其登用、初與乃久俱、與造等儀之議、後數奉旨、編著極駭矣、人或謂之曰、少者思慮、以致擲養、春齋輯曰、武人執兵、而戰效死、建功、學者讀書、立言為、隕性命、閱其所望也。

春齋幼時：居平安 「譜略」元和四年鶯峰一歳の条に

「五月二十九日生於京都新町宅」【小字双行】在二四條坊門錦ノ小路ノ之際ニ。：先考（羅山）在二江戸一ニ。母順淑孺人有二養ス之ヲ。：」（括弧内筆者註。以下同）とある。

羅山が幕府に仕官したのは慶長十二年。以来、江戸・駿府・京都を往来する生活を続けていた。

於文詞：師松永貞徳 那波活所は儒者。慶安元年一月三日没、五十四歳。字は道円、活所はその号。藤原惺窩に師事して儒学を修める。羅山とは同門。また寛永十九年には、後述『寛永諸家系図伝』の編纂に羅山らとともに従事した。松永貞徳は歌人・歌学者・俳諧師。承応二年十一月十五日没、八十三歳。羅山とは、古典の公開講義をとも行ない、当時伝授中心であった古典研究の慣習を打破するなど、学問上の交誼は深い。後に言うように、

十七歳で羅山に従って江戸に赴くまでの間、「譜略」の記述を辿ってゆくと、寛永三年鶯峰九歳の条に「八月朔日 先考從二台駕ニ入ル京ニ。：冬、先考赴ク江戸ニ。依テ其命ニ就ニ松永貞徳ニ習フ国字ヲ。：」、また、同十年十六歳の条に「時時會ニシテ那波道円ニ、聽ク其講ニ『孟子』」。又為ニ余ガ講ニ『春秋胡氏伝』」、同十一年十七歳の条に「与ニ道円一會ニスルコト如シ前ノ。聽ク其講ニ『感興詩』」。又来ニ余宅ニ、講シテ学ヲ論ズ文ヲ。：」などとあり、この時期の学問の師として活所、貞徳の名を挙げる。

年十七始入江戸：日益警拔 「譜略」寛永十一年十七歳の条に「六月、先考從ニ台駕ニ入ル洛ニ。：以ニ官事繁務ヲ、未ダ違レレ拜ニ幕下ヲ。幕下東行ノ之後、先考暫ク留ル洛ニ。十月三日、携ニ宜人及ビ余、靖（林読耕齋）并ニ妹一赴ク江戸ニ。断レ髪ヲ号ニ春齋ト。：」とある。以後「譜略」は、翌十二年十八歳の条に「二月、聖堂積菜、講ズ『論語』、首章一。夏秋ノ之間、患ニ小瘡ヲ累月。自レ是、在宅ニ勵ニ讀書ヲ。一ニ覽シ『事物類聚』ヲ、全部加レ朱ヲ。有レトキハ暇則、作レ詩」、十三年十九歳の条に「在レ家ニ專ラ学問。：」、十四年二十歳の条に「読ニ『通鑑綱目』ヲ、全部加レ

朱ヲ。且涉<sup>ニ</sup>獵<sup>ス</sup>群書ヲ。又見<sup>ニ</sup>日本ノ旧記ヲ。凡<sup>ソ</sup>有<sup>ル</sup>トキハ公務一則、在<sup>レ</sup>家ニ略預<sup>リ</sup>聴<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>」などと、鷲峰がこの時期に家塾で学問に専念したことを強調しており、実念齋の言う「自<sup>レ</sup>此趨<sup>ニ</sup>家庭<sup>ニ</sup>、文芸日<sup>ニ</sup>益<sup>ス</sup>、警拔<sup>ト</sup>」と評するに相応しい行文となっている。

及其登用：編著極夥矣。「譜略」には幕儒としての公務に関する記述はあまり見えない。一方「墓誌」では「寛永甲戌（十一年）、従父東来、住居江府。其年奉拜大猷公。其後或近召御前、草異国之書、読書法式印章、或咨詢執政、能堪其事。或奉命赴于日光、于久能、于南紀、于京師、勤勞不少。…」と、公務におけるその活躍を伝え、続けて後述の『寛永諸家系図伝』編纂、五経の私考の執筆のことを記し、「…且覃心四書、篤信程朱、作国字解、其餘編輯之書甚多。…」と結ぶ。この辺りの念齋の記述は、次の条とともに、こうした「墓誌」の行文をもとにしたもの。

齋齋家材博識、專<sup>リ</sup>用力<sup>ヲ</sup>、述<sup>ス</sup>作<sup>ル</sup>五經皆有私考、累<sup>テ</sup>數十卷、其佗小品極多、其卷帙浩論者、為<sup>レ</sup>本朝通鑑三百十

卷寛文四年十一月起筆、十年十月成、其修通鑑也、  
為<sup>レ</sup>衆<sup>ニ</sup>奉<sup>ル</sup>、官賜月俸、以供費用、其作文祇憑腹稿、  
口占、而善書者不能給、又如諸家系圖傳、亦三百餘、  
卷寛永十七年十二月起筆、二十年九月成。

五経皆有私考 「墓誌」に「…(寛文)癸卯(三年)之冬、講了五経。冬、作私考、開示蘊奥。事達台聽、賜弘文院學士号。…」とある。「私考」とは、具体的には『春秋胡氏伝私考』(写本八卷六冊、承応三年跋)、『詩経私考』(写本三十二卷三十三冊、寛文十年序)、『周易私考翼』(写本七卷七冊、延宝五年序)、『書経集伝私考』(写本四卷四冊)、『礼記私考』(写本十一卷十一冊)などを指し、いずれも現在、内閣文庫にその稿本が伝わる。また、元禄二年七月人見竹洞撰「鷲峰先生全集後序」(『鷲峰林学士詩集』末尾に載す)においても「…伏以、先生有功於学者有三美也。寛永承命服羅山夫子之勞、叙諸家之系譜。其美一也。寛文提挈史館而撰本朝通鑑。其美二也。弱冠講五経、各編私考。其美三也。誰能企及乎。…」と、『寛永諸家系図伝』・『本朝通鑑』の編纂とともに、五経の私

考の執筆が鷲峰の偉業として挙げられている。

本朝通鑑三百十卷 羅山が編纂した『本朝編年録』（寛永二十一年起筆、慶安三年成）の統編として、鷲峰が中心となり編纂した史書。神武朝ノ宇多朝までを収める『編年録』を再度校勘して正編四十巻とし、醍醐朝ノ後陽成朝までを統編二百三十巻とする。その他、前編（神代）三巻、提要（正編・統編の摘録）三十巻、付録五巻、目録一卷、引用書目一卷があり、計三百十巻。

寛文四年十一月…以供資用『通鑑』の起筆・完成の年時に関して、「譜略」寛文四年四十七歳の条に「十一月朔日、本朝通鑑起筆。【小字双行】自是至<sup>ルマデ</sup>庚戌<sup>ニ</sup>（寛文十年）之冬<sup>ニ</sup>始末詳<sup>ナリ</sup>別記<sup>ニ</sup>」、同十年五十三歳の条に「十月十八日、通鑑殘編畢<sup>ク</sup>成<sup>ル</sup>。納<sup>メ</sup>諸<sup>ヲ</sup>三箱<sup>ニ</sup>、憑<sup>テ</sup>執政久世大和ノ守<sup>ニ</sup>啓<sup>ニ</sup>達<sup>之</sup>」。総計三百十巻。…」とある。

この他、念齋は「譜略」寛文四年の条の小字註に言う「別記」に相当する「国史館記」（『鷲峰林学士文集』巻三）の「使<sup>下</sup>臣<sup>ヲ</sup>率<sup>テ</sup>二男門人書生筆吏三十餘輩<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>総<sup>中</sup>裁<sup>上</sup>之<sup>ヲ</sup>、賜<sup>フ</sup>二月俸日支<sup>ヲ</sup>。且<sup>ツ</sup>建<sup>テ</sup>蔵書庫<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>聚<sup>メ</sup>二旧記<sup>ヲ</sup>、造<sup>リ</sup>庖厨<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>設<sup>ク</sup>二飲食<sup>ヲ</sup>。…」、あるいは「墓誌」

の「庚戌之歳、国史終編。総三百十巻。官命賜名本朝通鑑。加増食禄、且賜俸支、教育諸生。…」といった記述を参照する。

又如諸家系図伝：九月成 正しくは『寛永諸家系図伝』。真名本・仮名本各百八十六冊。羅山・鷲峰など編。松平氏、清和源氏、平氏、藤原氏、諸氏の五種、および医者、同朋、茶道の三類に分かった系譜を編集したもの。金地院元良・見樹院立詮などの僧侶、堀杏庵・人見卜幽軒・辻端亭・那波活所などの儒者が参画した。起筆・完成の年時は「譜略」寛永十七年二十三歳の条に「十二月朔日、会<sup>シ</sup>誓願寺<sup>ニ</sup>、試<sup>ス</sup>二系図<sup>ノ</sup>起筆<sup>ヲ</sup>。…」、同二十年二十六歳の条に「九月九日、諸家系図伝悉<sup>ク</sup>成<sup>ル</sup>。漢字倭字総<sup>テ</sup>三百餘巻」とある。

本集百二十卷名鷲峰文集讀之有益猶羅山集近時  
學人求詞藻而不考事實者以為不足見

鷲峰文集 正しくは『鷲峰先生林学士文集』。目録二巻  
一冊本文百二十巻五十冊。『鷲峰林学士詩集』（目録三巻



収「寄石丈山」を指す。承応三年三月執筆。石川丈山は、詩人。寛文十二年五月二十三日没、九十歳。羅山の代より林家と親交を持った。

近歳：除焉（本文異同）なし。

西風涙露編 三卷。寛文六年成。二十三歳で夭逝した男梅洞を追悼した文集。『鷲峰先生林学士文集』卷七十七～八十所収。

近年聞：守家業而已。『鷲峰先生林学士文集』卷七十八所収の「西風涙露」卷中からの引用。（本文異同）なし。

某候一夜與近臣左右飲。侯問曰自江戸至京。經國也。也一人屈折答曰。武藏相模伊豆駿河而言窮。座有少年。誦春齋詩云。武相豆駿遠州際。參尾勢江雅路中。侯喜誦其句者再三。

春齋詩 『鷲峰先生林学士詩集』卷八所収「旅懷」を指す。卷八は、寛永二十年九月、後光明天皇即位のため酒井忠勝・松平信綱・羅山らとともに上洛した際の詩を録した「西征紀行」を収める。因みに羅山「癸未紀行」

（正保二年刊）もこの際の詩をまとめたもの。引用箇所は「旅懷」の頸聯。（本文異同）なし。

續日本紀 養老六年七月。勸課天下種樹。晚禾養麥。餘是言。則世暖蕃麩也。尚矣。意者當時獨給農食耳。其上下通用之。製殊極精巧。以代珍饌滋味者。蓋始于健業以來。春齋戲答。煙酒文曰。近歳多嗜蕎麥麩者。器成堆。放飯流飯。張口。服臉。滿股。擲。嗽。更十餘椀。果然不厭。非消麵蟲。則不及此乎。蓋是田舎野人之食也。然侯伯之席。文雅之筵。往往以是為頓點。涼俗之化。無奈之何。煙酒之行。既五十餘年。蕎麥之行。殆三十年。共是雖無益於人。亦無害者必矣。且原益軒大和

續日本紀 四十卷。藤原繼繩・菅野真道撰。延暦十六年

成。『日本書記』につぐ国史で六国史の一。近世においては、京都の儒医立野春節が版行した明暦三年版本が唯一の公刊本であり、多数の後刷本が存在する。

養老六年：晚禾蕎麥 『続日本紀』卷第九養老六年七月

の条の本文に忠実ではない。該当箇所の明暦三年版本本文は「是<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>今夏無<sup>レ</sup>雨<sup>フ</sup>ルコト、苗稼不<sup>レ</sup>登<sup>ラ</sup>。宜<sup>ク</sup>丙<sup>ノ</sup>令<sup>メ</sup>天下国司<sup>ヲ</sup>シテ勸<sup>メ</sup>課<sup>テ</sup>百姓<sup>ヲ</sup>、種<sup>中</sup>樹<sup>セ</sup>晚禾・蕎麦及<sup>シ</sup>大小<sup>麦</sup>上<sup>ヲ</sup>、藏<sup>ニ</sup>置<sup>テ</sup>儲積<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>備<sup>乙</sup>年荒<sup>ニ</sup>。」

戲答惡煙酒文 『鴛峰先生林学士文集』卷五十二所収。

寛文元年十月撰。愛煙家「漂白子」、嫌煙家「清静子」

という架空の人物の問答形式を借りて、喫煙の特効を論じた戯文。鴛峰門人・人見竹洞に「惡烟酒文」(『東海集』

〈筑波大学図書館蔵写本九卷九冊〉卷五所収)の作があり、清静子が喫煙の弊害を説いて漂白子が議論に負けるという内容であるが、本文はこれに答えたもの。

近歳多嗜：無害者必矣 〈本文異同〉なし。

貝原益軒 儒学者。正徳四年八月二十七日没、八十五歳。

大和本草 十六卷附録二卷、諸品図二卷。宝永六年刊、

諸品図は正徳五年刊。邦人による初の本格的本草書で近世期を通じて重用された。

煙草慶長：番船 『大和本草』卷六葉類「烟花」の項で

はその伝来について「…たばこは日本にも中華にも古にはなし。近代外国より渡ると云。故に『本草綱目』には

のせず。日本に初めて来ること天正の初年なるべし。或曰、慶長十年初て来る。…」と言い、念齋の記述はこれを要約したもの。

本齋多別號、向陽軒、葵軒、竹籬、爬背子、睡顏齋也、魯齋、  
物格菴、温故知新齋、頭雪眼月菴、傍花隨柳菴、  
吟央、  
埃、仲林、南嶽、恒宇、南墩、櫻峰、碩果等、皆所自稱也。

向陽軒：爬背子 以下に列挙する鴛峰の別号は、延宝三

年撰「称号義述」(『鴛峰先生林学士文集』卷百二十所収、二十二に及ぶ号の由来を自から説明したもの)などによる。「向陽軒」の条に「寛永十三年丙子之冬、先考令<sup>メ</sup>テ

朝鮮国全梅隱<sup>ヲ</sup>書<sup>ニ</sup>此<sup>ノ</sup>三字<sup>ヲ</sup>、以<sup>テ</sup>授<sup>レ</sup>余<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>号<sup>ト</sup>。取<sup>テ</sup>

諸<sup>ヲ</sup>蘇麟<sup>ガ</sup>「向<sup>レ</sup>陽<sup>ニ</sup>花木易<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>春<sup>ノ</sup>之句<sup>ニ</sup>而規<sup>ニ</sup>祝<sup>スル</sup>之<sup>ヲ</sup>

也。其<sup>ノ</sup>後、見<sup>テ</sup>朱文公<sup>ノ</sup>「竹籬向<sup>レ</sup>陽<sup>ニ</sup>開<sup>ノ</sup>之句<sup>ヲ</sup>而号<sup>ス</sup>

竹籬<sup>ト</sup>。又見<sup>テ</sup>白楽天<sup>ガ</sup>「爬<sup>レ</sup>背<sup>ヲ</sup>向<sup>レ</sup>陽<sup>ニ</sup>眠<sup>ノ</sup>之句<sup>ヲ</sup>而号<sup>ス</sup>

爬背子<sup>ト</sup>。又因<sup>テ</sup>庭<sup>ニ</sup>植<sup>ル</sup>葵<sup>花</sup>一<sup>号</sup>葵軒<sup>ト</sup>。此<sup>レ</sup>等皆自<sup>リ</sup>向

陽<sup>ノ</sup>二字<sup>ニ</sup>起<sup>リ</sup>来<sup>ル</sup>者也。寛永二十年癸未<sup>ノ</sup>秋、朝鮮朴蒼雪

書<sup>ニ</sup>葵軒<sup>ノ</sup>二字<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>額<sup>ト</sup>掛<sup>ク</sup>之<sup>ヲ</sup>。罹<sup>ニ</sup>丁酉<sup>ノ</sup>之災<sup>ニ</sup>而為

「鳥有<sup>ル</sup>」とあり、念齋が冒頭に挙げる向陽軒、葵軒、竹圃、爬背子などはすべて、もと寛永二十年來聘の朝鮮通信使・全梅隱との贈答に因むものであった。以下、念齋が挙げる鶯峰の別号は、順番は一致しないものの、「称号義述」にすべて見える。あるいは著名なものから並べたか。

春齋有二男。長春信。又名慈。字孟著。號勉亭。又號梅洞。有才學。本朝通鑑之修。與有力焉。年二十三先卒。士論惜之。所著有梅洞遺稿。史館茗話等。春齋作西風淚。靈編悼之。其書載。陳元寶曰。父子齊名。古來稀也。林家三代秀才相繼。可謂日域美談也。次鳳岡。嗣承箕業。

長春信：年二十三先卒。春信は林梅洞。「略譜」寛永二十年二十六歳の条に「八月十一日、長子春信生<sup>ル</sup>。名、愨、字、孟著、号、勉亭<sup>ト</sup>、称、梅洞<sup>ト</sup>」、寛文六年四十九歳の条に「八月四日、(梅洞が)臥<sup>レ</sup>病<sup>ニ</sup>、九月朔日終<sup>レ</sup>命<sup>ヲ</sup>。…」とある。また『熙朝儒林姓名録』に「名愨、

字孟著、一字春信、号梅洞、又号勉亭。春齋長子」とある。

梅洞遺稿 いわゆる『梅洞林先生全集』。四十卷十六冊。『自撰梅洞詩集』十卷四冊、『梅洞先生文集』十卷三冊、『梅洞林先生詩統集』二十卷九冊からなる。林鳳岡編。寛文八年刊。

史館茗話 一卷。中古以降の本朝の詩人に関する挿話集。四十二条集めたところで梅洞が夭逝したため、鶯峰が百条に増補する。寛文八年刊。

陳元寶曰：美談也。陳元寶は詩人。明の浙江の人。寛文十一年没、八十五歳。引用箇所は、元寶が石見吉永藩主(天和二年、近江水口へ移封)加藤勿齋に語った言葉として『鶯峰先生林学士文集』巻七十七所収の「西風淚露」巻上に見える。〈本文異同〉なし。

(付記) 引用文の訓点・送り仮名は基本的に原本通りとしたが、一般的でないものに関しては、改めた箇所がある。また句読点はすべてにわたり、私に付した。

(大庭 卓也)